

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 8月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。



とうとう、こんなバッチを作りました。

階段を昇った会社廊下で、毎朝出勤時に検温し、
一覧表に記入しタイムカードを打刻します。37.5 度
以上であれば自宅に戻り、その日は自宅勤務する。こ
んなルールを設けています。私の平熱は 36.8 度なの
ですが、おおよそ毎朝この体温が出ますので、非接触
の体温計も、あながち出鱈目でもないようです。

会社に訪問頂ける色々な方々にも、手と靴底の消
毒と検温をし、訪問カードに記載して頂くようになって
います。運送屋さんにはそれも気の毒なので、ここで呼
び鈴を鳴らしてもらって、荷受けをしております。

科学的根拠の存在有無より、倫理的な視点に立
っています。商品出荷業務をしている青果ターミナルで
も同様のルールが適用され作業は、使い捨て手袋を
着用しています。

先の検温バッチは出先にも、見えるところに付けて
行く事を義務付しています。



ポイントを『元気』においています。食に携わる者
として元気でなければいけないと考えています。元気で
いられることは『健康な身体』と『健全な精神』の
賜物だと思うからです。Covid-19 は、重篤化するか
否かが勝負だったと思っています。

中途半端な見解を書く訳には行きませんが、どれだ
け色々な科学的と思われる資料に接しても、どうもよく
分からないというのが正直なところ。政府をはじめ
とする行政主導の報道は、眉毛に唾を付けて聞くこと
は言うに及びませんが、各国報告されている内容も因
果関係に確たる統一感がありません。という事は単
なるウイルスがもたらす自然界の現象ではなく、何らかの
人為的な要素が入っている可能性があるが私の結論
です。

古い話で恐縮ですが 1968 年の幕明けは私が中学

3年生で迎えました。その前年からTVのニュースで盛んに全共闘運動が取り上げられていて、同じような若い人たちがその中心に出て来ていました。いつの間にこういう事が起こっていて、その内容は何なのか私はまったく分かりませんでした。本を読み、ニュースにかじりついて、自分なりに理解しようと努めました。

ある時TVニュースで、デモ隊に向かって機動隊が催涙弾の銃口を、禁じられている水平にして撃っている場面を見ました。その数時間後に流れた同じフィルムから、その水平に撃っている場面だけがカットされ放映されていました。以来TVのニュースをそのまま真面に受け止めることは無くなり、疑うというよりむしろ何を意図して放映しているのかを考えるようになりました。極端なことを言えば、TVが騒げば騒ぐほど何か裏で大変な事が起こっていると感じるようになってきました。

PCR検査で陽性とする事と、『感染』とは別次元だと知っています。感染とは少なくとも症状を伴う事だと思います。陽性とは、喉の粘膜にコロナウイルスが付着しているか否かの状態を知る検査だと思っています。その粘膜についたウイルスが、その下の皮膚に当たる層を突き抜けて細胞内に入り、増殖を始めて感染と呼ぶ初期段階に入るのだと理解しています。

TVで言う『無症状の感染者』とは、これらどの段階のひとを指しているのか分かりません。

弊社で熱を毎日測っているのは、ウイルスが体内に入りその撃退をする為に免疫が働き、熱が出る状態を測定しているつもりです。今は人が集まりやすい商行施設などは、モニターで写すだけで熱を感知する機械が見張り番をしているところがあります。同様に症状が出ているひとをOFFしようということだと思いますが、症状が出ている人と無症状の感染者とを区別することはできません。

こういう状況を踏まえると、陽性反応が出た程度で症状が無ければ、体内に抗体が出来るはずもなく、普段持っている免疫機能でCovid-19は消滅してしまった事になります。熱が出たからと言って抗体が出来るとも限りません。症状が出た人でも抗体が出来た人と、

持っている免疫機能で回復した人のパターンもあるはずですが、元来人間が既に保有している常在ウイルスと新型コロナウイルスとを、どのように区別しているのかも不明です。

まったく知れば知るほど、騒ぎの訳が分からなくなるのですが、そもそもその程度ウイルスなのか、それとも最初はもっと重篤化する可能性があるウイルスが時を経て、その確率が低く変化して来たとも言えてしまいます。

法によるロックダウンした国や街でも、その後も死者や感染者が多く出て、緩やかな自粛規制に留まった我が国でそれほどの数に上らなかつたりしています。また、その事由をまことしやかに説明されても、とても一貫性があるとは思えません。

本当に恐れるほど空気感染するのでしょうか。接触感染の方がよりシビアに思うのですが…。何か不安に陥られ、その不安がまた二次的な不安を発生させているような気がして、どのような意図の元の騒動なのか正確に見極める必要があると思っています。

私共は食に携わる者として、出来る限り食品添加物や農薬等を避ける事の推奨や、避けきれない場合の対応能力を養う健康志向や、人の暮らしにとって大切な情報を食品と共に提供できる努力を念頭に置いています。

経済摩擦だけではなく、米中の軍事衝突も無いとは言いきれなくなってきたし、洪水という、水のチカラによる災害、バッタという生物による穀物食害を考えると、米中共に我が国への食糧輸出国なので、10数年前に懸念したことが現実になりつつあると感じています。

私自身牧歌的な話しではなく、地に足付けた営みについて考え直す機会なのかも知れないと思っていますが、それによって事業の方向性も変わるような気がして来ました。

今後とも、何卒よろしくお願い申し上げます。

吉田清一郎